黒埼町の今昔

第220回　執筆　宮田栄門

黒埼のスポーツ（十四）

宗村喜介さんは、戦時中、陸軍で少年飛行兵の指導にあたり、現在、新潟県少飛会の会長を努めている。

（先月号からの続き）

昭和十年春、宗村喜介さんが清水善夫さんと一緒に新潟中学校に入学したその頃、新潟の男子中等学校は新潟中学と新潟商業の二校しかなかった。

子供のころから野球が大好きだった宗村さんは先輩にすすめられて太洋クラブに入ったが、その第一日目の練習から上級生にしごかれて怖くなり翌日の練習に行かなかった。すると次の日が大変だった。電鉄の越後大野駅に、電車から降りた宗村さんを説教しようと先輩達が待ち構いていた。「どうして練習をサボッタんだ」と怒鳴られて恐しくなって、それから真面目に練習に通ったというが、昔は、少し乱暴と思われるこうした硬派的なやり方が当り前として、まかり通っていたのである。

練習といっても一年生の守備位置はたいてい外野の立ちんぼか、田んぼに飛んだボール探しが専門だったので、みんなが嫌がっていた。

負けずぎらいの宗村さんは、野球がうまくならなければ、何時までも球ひろいで試合に出してもらいないと、猛練習して三年生の終りころから試合に出されるようになったという。

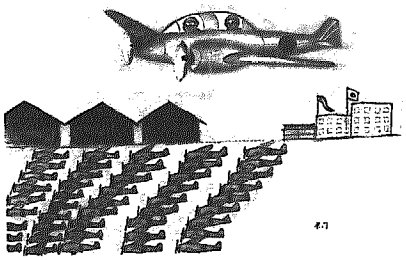
昭和十三年に陸軍航空隊に志願した宗村さんは立川市の飛行学校で基礎訓練を受けると機上無線に配属され、茨城県水戸市の陸軍航空通信学校で少年飛行兵の指導訓練に当った。

十九年頃から、大勢の特攻隊員達を戦場へ送り出したが、国のため一命を捨てて敵艦に体当りすることを少しも恐れぬ、純真無垢な若者達の出撃する時交した手の感触は今も忘れられない、また自分の指導した子供達が特攻の選抜から外れることを願ったと宗村さんは言う。

終戦の年の五月、機銃も何もない、武器といえば拳銃だけという、全く非武装の新司偵（時速八〇〇キロの最新鋭の偵察機）で制空権の全くない東京―南京間を決死の飛行をした体験談が記されている。ようやく南京の日本陸軍飛行場上空に達して地上を見たら、そこに百五十機もの友軍機が整然と並んでいて、劣勢下のわが軍によくこんなに無傷な飛行機があったものだと思いながら降りて見て、それがみな敵の目を欺く、木製の飛行機だったのに驚いたということである。

昭和二十年十月除隊になり故郷に帰ると早速青年団運動に参加して二十五年から西蒲原郡連合青年団の幹部となり、郡主催の野球大会を初めて黒埼村に誘致、大会が盛大に行われたことが一番印象に残っているという。

また、太洋クラブの先輩浅妻康二さん、大塚久松さんや、同期の清水善夫さんに後輩の皆さん達と、燕や、内野、巻等によく野球の遠征試合をしたが、帰ってから新潟屋での一杯はみんなの楽しみだった。亡くなった新潟屋の博ちゃんがまた、太洋クラブというと、何時も安く勉強してくれてありがたかった。



最新鋭偵察機百式新司偵（対地速度800K）で東京―南京間を飛ぶ（昭和20年5月、南京飛行場に並んだ150機、実は木製の飛行機だった。）

優勝して帰ると、北沢義東先生や、松井信一先生に報告に行って御祝儀をもらい、それがまたみんなの慰労会などの飲みしろとなり、両先生に太洋クラブが大変お世話になったことを、感謝に耐いないと記されている。

太洋クラブは、わが青春時代そのもので、辛く苦しかった戦争体験もまた青春の真っただ中だった。と記されてあり、「その思い出を大切にして一日々々を充実した生活を送るように心がけ、これからの老後をエンジョイしてゆきたい。」と結んでいる。

新潟県「少飛会」の会長として活躍中の宗村さん

新潟県には戦時中、四百人を超す陸軍少年飛行兵がいたがその約半数位が、特攻出撃等で戦死した。戦後、生き残った二百人近い人々が、少年飛行兵の会「少飛会」を結成し、毎年四月上旬に新潟の護国神社で、戦死した戦友の慰霊祭を行い、十月十日には、東京九段の靖国神社に全国から一千人以上の少飛会員が集まり盛大に慰霊祭を行っている。

宗村さんは五、六年前から新潟県少飛会の会長を務め多忙な日々を送っておられる。

北沢先生、松井先生の紹介

北沢義東先生の北沢医院は役場前にあった。今は先生の名を知る人も少くなったが、信州出身の先生は、当時としては大柄で体格の良い古武士の風格の人だった。

スポーツ熱心な人で、野球、陸上競技と、スポーツをやる人の大半が先生の指導を受けている。

黒埼中学校にグランドが作られる時には、医師の仕事もそっちのけに、毎日のようにグランドへ足を運んでおられたのが印象的である。

松井信一先生は、仲町にあった松井医院の人で、父は医院のかたわら黒埼村長を永く務められた有名な松井広さんである。信一先生も医師で、高橋正平さん達と昭和初期に太洋クラブをつくり、浅妻康二先生や、後輩達に野球の指導をした人である。後に黒埼町の教育長を務められた温厚で物静かな人だった。

感想文(5)大野町々内対抗野球大会に出場して

二階堂正吉（大正二年八月二十五日生）

昭和二十三年春、浅妻康二さんから「先生、近く大野で近郷野球大会を開きますが選手で参加下さいませんか。」とのお呼びかけをいただきました。私は少年時代から野球が大好きで関屋小学校五、六年生の頃は、新潟商業学校の練習を毎日の様に見に行き、将来は甲子園へ出場したいと思っていました。（続く）

平成十二年八月発行　四四三号　発行／黒埼町役場　〒九五〇-二一九六　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三-一　電話／〇二五-三七七-三一〇一　編集／総務課（担当・総務係）

「広報くろさき」は資源保護のため再生紙を使用しています。